

小山角田遺跡

(永興物産株式会社袋井工場敷地造成事業)
に 関 わ る 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書



1 9 9 5 . 3

静岡県袋井市教育委員会

お や ま す み た
小山角田遺跡

(永興物産株式会社袋井工場敷地造成事業)
に 関 わ る 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書

1 9 9 5 . 3

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は平成5(1993)年4月1日より平成6年3月30日の間に、静岡県袋井市小山字七つ会204-1外14筆で実施した小山角田(おやますみた)遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、永興物産株式会社代表取締役植田常幸を委託者とし、袋井市長豊田舜次を委託者として発掘調査の委託契約を締結し、袋井市教育委員会が発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は、早川保子(袋井市教育委員会・臨時調査員)が調査を担当した。
4. 資料整理・報告書作成も早川が実施した。
5. 発掘調査に際して、永興物産株式会社の皆さんにはたいへんお世話になった。ここに記して感謝したい。
6. SK17・SK39の出土遺物の考察については岩本貴氏(財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所)に玉稿を賜った。また加藤埋文氏(同)にも御配慮を頂いた。ここに記して感謝いたします。
7. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
8. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査経過	1
第3章 調査体制	3
第4章 調査方法	3
第5章 地理的環境・歴史的環境	4
第6章 遺跡の概要	6
第7章 まとめにかえて	25
(付載) 小山角田遺跡における弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器	27

挿 図 目 次

第1図	小山角田遺跡の位置	2
第2図	発掘調査区的位置	2
第3図	発掘調査区の全体図	5
第4図	遺構実測図(1)	8
第5図	遺構実測図(2)	9
第6図	遺構実測図(3)	10
第7図	遺構実測図(4)	11
第8図	遺構実測図(5)	12
第9図	遺構実測図(6)	13
第10図	遺構実測図(7)	17
第11図	遺構実測図(8)	18
第12図	遺構実測図(9)	19
第13図	遺構実測図(10)	20
第14図	井戸状遺構 S E 3 出土井戸枠の線刻拓影	20
第15図	出土遺物実測図(1)	21
第16図	出土遺物実測図(2)	22
第17図	出土遺物実測図(3)	23
第18図	出土遺物実測図(4)	24

写 真 目 次

1	発掘調査区全景	
2	西区全景	
3	中央区全景	
4	東区全景	
5	土塙状遺構 S K 10	(東から)
6	土塙状遺構 S K 11	(北から)
7	土塙状遺構 S K 15	(東から)
8	土塙状遺構 S K 42	(西から)
9	土塙状遺構 S K 53	(北から)
10	井戸状遺構 S E 1	(東から)
11	井戸状遺構 S E 2	(北から)
12	井戸状遺構 S E 3	(東から)

- 13 井戸状遺構 SE 4 (西から)
- 14 井戸状遺構 SE 5 (東から)
- 15 井戸状遺構 SE 6 (北から)
- 16 井戸状遺構 SE 7 (北から)
- 17 溝状遺構 SD 1・2 (西から)
- 18 溝状遺構 SD 30・41 (北から)
- 19 溝状遺構 SD 5 (東から)
- 20 溝状遺構 SD 29 (北から)
- 21 竪穴式住居 (南から)
- 22 竪穴状遺構 SK 39 (東から)
- 23 竪穴状遺構 SK 44 (西から)
- 24 竪穴状遺構 SK 47 (西から)
- 25 竪穴状遺構 SK 48 (東から)
- 26 竪穴状遺構 SK 60 (北から)
- 27 竪穴状遺構 SK 52 (北から)
- 28 井戸状遺構 SE 8 (東から)
- 29 井戸状遺構 SE 9 (南から)
- 30 井戸状遺構 SE 10 (西から)
- 31 井戸状遺構 SE 11 (東から)
- 32 溝状遺構 SD 19・058 (西から)
- 33 溝状遺構 SD 38・39・SK 18 (南から)
- 34 溝状遺構 SD 44 (東から)
- 35 土壇状遺構 SK 17・99 (東から)
- 36 溝状遺構 SD 13・080 (北から)
- 37 発掘調査風景
- 38 発掘調査風景
- 39 発掘調査風景
- 40 空中撮影用ラジコン・ヘリコプターを操作する関係者
- 41 SK 17 出土土器集合写真
- 42 SK 39 出土土器集合写真
- 43 出土遺物写真 (その1)
- 44 出土遺物写真 (その2)
- 45 出土遺物写真 (その3)

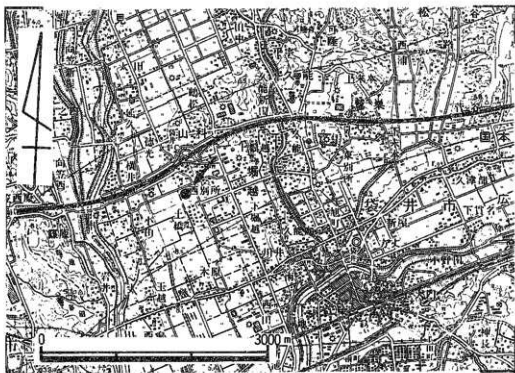
第1章 調査に至る経過

袋井市小山地内の開発を計画している愛知県小牧市の東武運輸株式会社、浜松市内の仲介業者を通じて平成4年8月17日に袋井市教育委員会に「埋蔵文化財試掘調査の依頼について」を提出した。同書によると袋井市小山七ツ会、小山角田の田畑となっている17筆に配送センターの新設を計画しているとのことであった。これを受けて袋井市教育委員会は平成4年8月19日～20日に文化財係長吉岡伸夫を同所に派遣して試掘調査を行わせた。これは、試掘依頼地内にバックホーで15地点の試掘坑をあけ土層観察するとともに遺構・遺物の確認をするものであった。この調査の結果は、平成4年8月28日付けの「埋蔵文化財等試掘調査の結果について（報告）」を要約すると試掘地内は遺構・遺物出土の濃淡はあるもののすべて土橋遺跡（当時はまだ土橋遺跡の範囲と考えられていた。）の範囲内であり、開発にあたっては発掘調査が必要であるとしている。しかし、この計画は事情によって中断し、次いで同用地内は永興物産株式会社の工場敷地造成事業が計画された。そして、平成5年3月18日、計画者の依頼により発掘調査計画書が袋井市教育委員会より永興物産株式会社あてに送付され4月1日付けで埋蔵文化財発掘調査契約書が締結され事業が開始された。

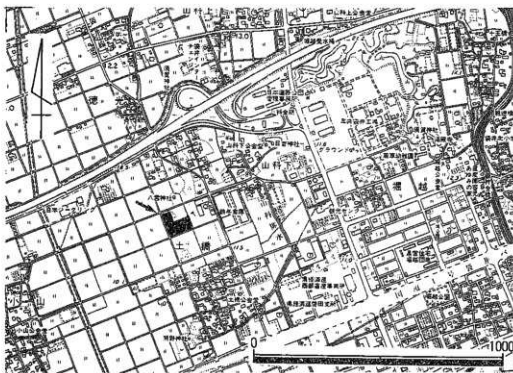
第2章 調査経過

平成5年4月1日 埋蔵文化財発掘調査委託契約の締結。

- 4月19日 重機による表土の除去作業。排水溝を掘り下げてから耕作土を除去する。
- 7月6日 東区の遺構確認作業を中心におこなう。排水作業も並行して行われる。
- 7月15日 弥生時代、鎌倉時代の遺構の発掘が行われる。天候はよくない。
- 7月29日 遺跡全体の土層図を作成する。囲いピンクとの打合せを行う。
- 8月4日 遺構の掘下げ作業が続く。SK51、054では土器が大量に出土する。
- 8月12日 好天のもと航空測量が行われる。ピットの断面図を作成する。
- 8月25日 中央区の掘下げ作業。写真撮影用の清掃作業も東区で行われる。
- 9月6日 台風接近のため風雨が強くなる。現場は水に浸かってしまう。
- 9月16日 長雨もあけて調査再開。SK70、SK73の井戸の写真撮影を行う。
- 9月27日 3ヶ所の遺構から土器上げ作業。忙しい、忙しい。
- 10月20日 1/100の模式図を作成する。
- 10月29日 遺構写真撮影。ベルコンの返却。シートのかたづけ。
- 11月1日 図面実測用の糸はり作業。
- 11月22日 SK50の井戸枠の取り上げ作業を行う。再下部より曲げ物や山茶碗が出土する。休憩用仮設小屋の撤去にブルー人が来たので国際交流を行う。
- 11月24日 最後に残ったSK57（井戸状遺構）の井戸枠を取り上げる。泥と湧水のため苦戦する。これにより現場作業をすべて完了する。



第1図 小山角田遺跡の位置 (1/50,000)



第2図 発掘調査区の位置 (1/2,500)

第3章 調査体制

調査計画	永興物産株式会社
調査受託	袋井市
調査実施機関	袋井市教育委員会

教 育 長	浅 井 通 男
教 育 次 長	長 沼 宣 男
社会教育課長	兼 子 春 治
文化財係長	吉 岡 伸 夫
主査(学芸員)	永 井 義 博
主任学芸員	松 井 一 明
学 芸 員	白 澤 崇 森 井 雅 彦
調 査 員	早 川 保 子 (本調査担当者)
経 理 事 務	村 田 博 美

(調査参加者) 大庭嘉平 鈴木武 池端清 松下静雄 山本敬一 村松和雄 伊予田寅次郎
 本多八重子 山本はつ江 寺田矩江 高橋邦夫 高橋四郎 山本修 山本喜久
 川島良一 佐藤好孝 鈴木定雄 大庭力 加藤友平 諸井貞平 松井澄夫
 戸倉みづ子 永田のお江 鈴木きみ子 大庭泰子 早川里美 寺田しま
 山崎好江 鈴木敏子 米田文孝 大谷宏治 壽幡茂 小野秀幸 永井正浩
 井上主悦 尾柿実 深野信之 南由紀 村上大輔 浅尾和重 新井仲治
 荒田恵 落合高晴 渡辺博史 小林正恵 田中里奈 墨谷真理子 沼澤志津
 坂東明子 中塚信子 大庭京子 池ヶ谷京子 山下悦子 船越スミ子

第4章 調査方法

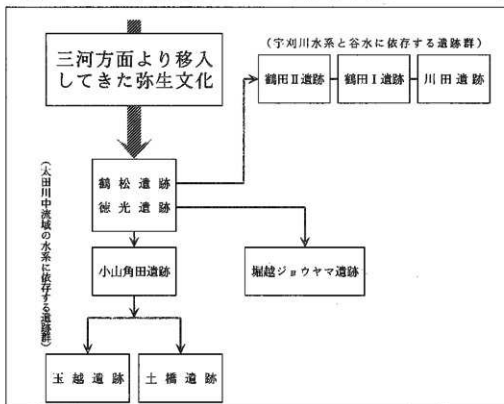
今回の発掘調査は、水田地帯の発掘ということで対象となる敷地内のうち、建物の建設される予定地内のみを発掘調査するため、その輪郭にそって重機で深さ約1mの排水用の溝を切りコンタにあわせて集水ますを設けて周囲からの水を遮った後、一般の遺跡と同じく平面調査を行った。水田耕作土は重機で除去し、次いで作業員さんの手により遺構確認をしながら発掘を行った。工場建設の時期と発掘調査終了の時期の関係もあって、遺構の実測はすべて小型ラジコンヘリコプターによる航空写真測量を使用し、発掘→測量→写真と工程の円滑化を計った。また、同方法で垂直・鳥瞰の写真撮影も行ない効率化を計った。調査における遺構・遺物の写真撮影については、中型カメラ(アサヒペンタックス6×7)1台と、小型カメラ(Nikon F401)2台を使用した。現場で使用したモノクロフィルムはフジ写真フィルム株式会社のネオシンSSを、カラーフィルムも同じくフジ写真フィルム株式会社のフジクローム100 デイライトフィルムを使用した。

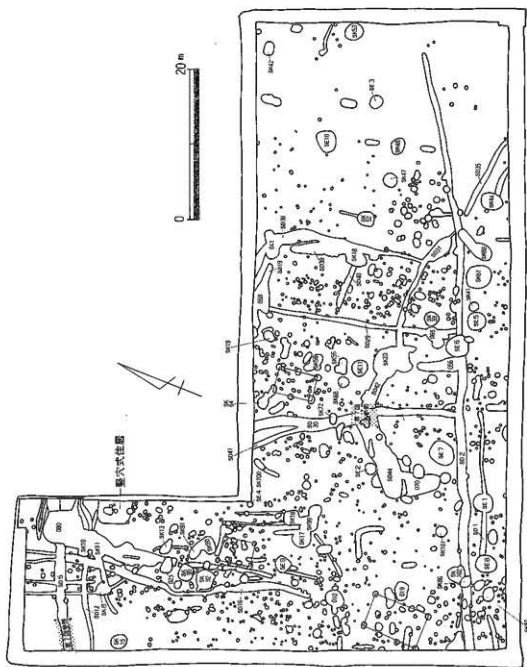
(教育委員会事務局)

第5章 地理的・歴史的環境

昭和58年ころに袋井市土橋で発掘調査が行われていた上橋遺跡の現場で地元の作業員さんから「この発掘現場とよく似た土器が小山の八雲神社のまわりからでたよ。わしがむかし用水路を掘ったら土器が出た。」という話をよく休憩時間に聞かされたことがあった。その当時は小山一帯はみごとに水田地帯で、昼休みに現地を歩いても土地を掘り起こした場所がないので遺物を表面採集することはできなかった。遺跡名ともなった「小山角田」は袋井市小山の集落の一番東に位置し八雲神社の南側の一帯で徳光の集落に近い場所でもある。また遺跡の東側の富士ロジックの倉庫周辺は旧河道のあとが残りがつては湿地となっていた。

さて、小山角田遺跡は太田川の旧河道が残した自然堤防が平野の中で埋没して形成された微高地上に位置している。この微高地には鶴田遺跡－鶴松遺跡－徳光遺跡－小山角田遺跡－土橋遺跡－玉越遺跡と北から南にゆるやかなS字形に並んでいる。これらの遺跡の初現は弥生時代中期前半から村を営んだと考えられる鶴松遺跡で、ここから南へ北へと人口が拡散していく様子が良くわかる（袋井市教育委員会 1982『昭和57年度 一般国道1号バイパス（袋井地区）埋蔵文化財調査その2報告書 土橋遺跡 ー第1次調査ー』）。つまり、鶴松遺跡は弥生時代中期から後期の集落跡として、徳光遺跡・小山角田遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡で、土橋遺跡が弥生時代後期から古墳時代後期まで継続していくのである。さらに、肥沃な沖積平野は、中世～江戸時代中頃にも多くの人々の生活を支え、現在までつながっている。





第6章 遺跡の概要

1 弥生時代・古墳時代の遺構

1 竪穴住居（第4図）東端が発掘調査区外になり全形は把握できなかったが一辺が約4.32mで深さは遺構検出面から10.8mの竪穴住居である。隅丸ではあるが方形か長方形かの判断はできなかった。柱穴と壁溝も明確には確認できなかったが、中央付近の床面には石皿として南東端では立ち上がりの壁に沿うような位置に焼土を検出した。

出土遺物 弥生時代中期に該当する壺型土器の破片と石皿を確認した。

2 竪穴状遺構

SK17（第4図）直径約2.47m 短径約2.20m 深さ約0.6m を計る平面形の土坑東端はSK99と切り合っている。

出土遺物 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の壺型土器、高環、小型の鉢、ミニチュアの壺型土器等が確認された。仔細は巻末の岩本貴氏の付載原稿を参照にされたい。

SK18（第8図）直径約2.84m 短径約1.41m 深さ約0.32m 平面形は楕円形で内部は2段に掘り込んで、東端は（SD38、SD39）と重複している。

出土遺物 弥生時代後期に該当する菊川式の形態を持った甕、壺型土器、高環が確認された。

SK39（第5図）直径約2.04m 短径約1.48m 深さ約0.45m 平面形はほぼ円形である。底面は平らで急な立ち上がりをしている。覆土は灰褐色土と茶褐色が主体となりレンズ状の堆積をしている。

出土遺物 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に該当する甕、壺型土器、高環などが一括出土している。仔細は本報告書巻末の岩本貴氏の付載原稿を参照にされたい。

SK44（第5図）直径約2.64m 短径約2.23m 深さ約0.76m 平面形は隅丸長方形をしている。土器が出土した位置は遺構底面より60cmほど上層であり、北側方向より一括廃棄したようであった。覆土は炭化物の多い暗褐色土となっている。

出土遺物 古墳時代前期に該当する甕、壺型土器が確認されている。

SK47（第5図）直径約1.84m 短径約1.81m 深さ約0.75m 平面形は西側の尖った円形をしている。覆土にレンズ状の堆積は見られず、遺物の出土位置は底面より約58cm上層で確認した。

出土遺物 弥生時代後期に該当する壺型土器の折り返し口縁部と胴部の破片が出土している。

SK48（第5図）直径約2.2m 短径約1.7m 深さ約0.33m 平面形は楕円形で覆土は黒灰褐色である。覆土は確認面では黒灰褐色でレンズ状の堆積を見せている。

出土遺物 古墳時代前期に該当する古式上師器のS字口縁の台付き甕と壺型土器を確認した。

SK60（第5図）直径約2.68m 短径約1.88m 深さ約0.58m 平面形は楕円形で断面は立ち上がりが急で上部の広がったコの字状をしている。北端は溝（SD37）と切り合っている。

SK52（第5図）直径約2.05m 短径約1.85m 深さ約0.58m 平面形は隅丸長方形で、底面の中央部は二段堀になっている。土器の出土位置は底面より38cm程上層である。覆土は暗灰褐色土が主体となり下層は粘性をもった覆土が認められる。

出土遺物 古墳時代前期に該当する甕、壺型土器、高環が確認された。

井戸状遺構（SE）

SE 8（第6図）直径約2.70m 短径約2.38m 深さ約0.92m 平面形は楕円形である。覆土はレンズ状の堆積を見せ、時間を掛け少しずつ埋没していった様子を伺わせる。断面は摺り鉢状となっている。

出土遺物 古墳時代前期に該当する古式土師器のS字口縁の台付き甕、土師器の甕、壺型土器、高環片が棒状の木材質と共に確認された。

SE 9（第6図）直径約2.12m 短径約1.96m 深さ約1.02m 平面は変形の円形となっている。断面は摺り鉢状で東側の壁を二段に掘っている。

出土遺物 弥生時代後期の菊川式の特徴を持つ高環の脚部片と口縁部の内側に波状文のある甕型土器の破片が確認された。

SE 10（第6図）直径約2.88m 短径約2.46m 深さ0.88mで平面形は楕円形で、断面は摺り鉢状になっている。遺物の出土した覆土は黒色有機質土層であった。

出土遺物 古墳時代後期の古式土式のS字口縁の台付き甕を遺構底部で木の枝状の木材と共に確認した。

SE 11（第7図）直径約2.20m 短径約1.95m 深さ0.80m 平面形は楕円形で底面中央で二段に陥入している。覆土はレンズ状の堆積を見せている。遺構確認面の覆土は暗灰褐色でその下層には炭化物が多く入る層があり遺物が混入する。

出土遺物 土師器の壺型土器、甕などの胴部破片と共に、4世紀に北陸の影響を受けている古式土師器の器台が確認された。

溝状遺構（SD）

SD 19（第7図）調査区の中央付近の北端から東方向に伸びる溝である。U字状のしっかりした掘り方の溝で、不定形な遺構（058）と重複している。確認長約5.0m 幅約0.80mを計測した。

出土遺物 弥生時代後期に該当する折り返し口縁の口唇部と土製の蓋が確認された。

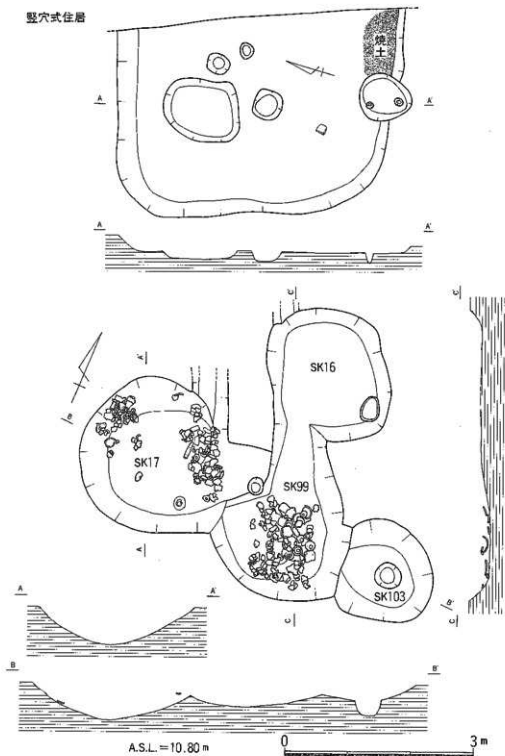
SD 38（第8図）自然堤防の高まりが東方向の低湿地に変わっていく境付近にある南北の溝である。南方向から見ると調査中に検出した状況から便宜上分けたSD32として流れ、（SD38）、（SD39）と合流すると溝は幅広く、深くなる。そして東西に横切る遺構（041）の辺りから流れを西に変え調査区外へと続いている。溝幅は計測可能な位置で約0.74m 深さ0.40mを計測する。

出土遺物 弥生時代後期に該当する菊川式の高環脚部や甕の胴部破片が確認された。

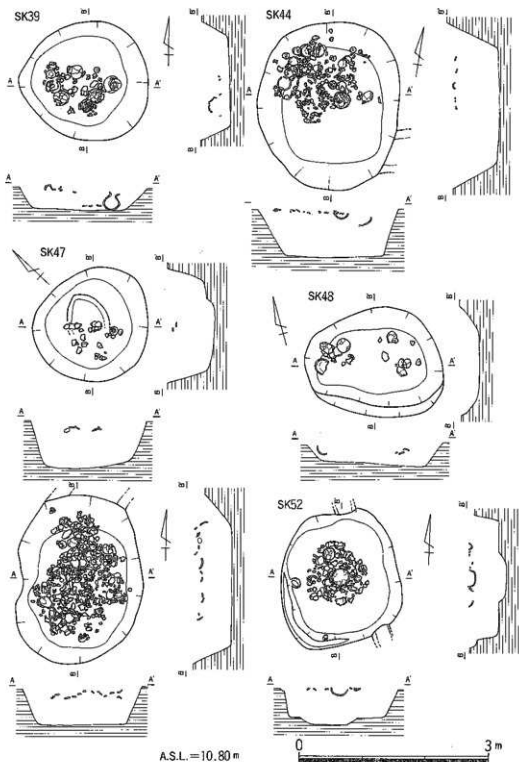
SD 39（第8図）確認長約9.70m 幅約1.28m 深さ約0.40m を計測し、南北方向に（SD38）と並行する溝である。出土土器の中には赤色に着色した小型の無頸鉢や高環があり祭祀に関わりを持つ遺構の可能性はある。

出土遺物 古墳時代前期の土師器の高環、壺型土器、甕 無頸鉢そして4世紀の北陸の影響を受けた器台が出土している。

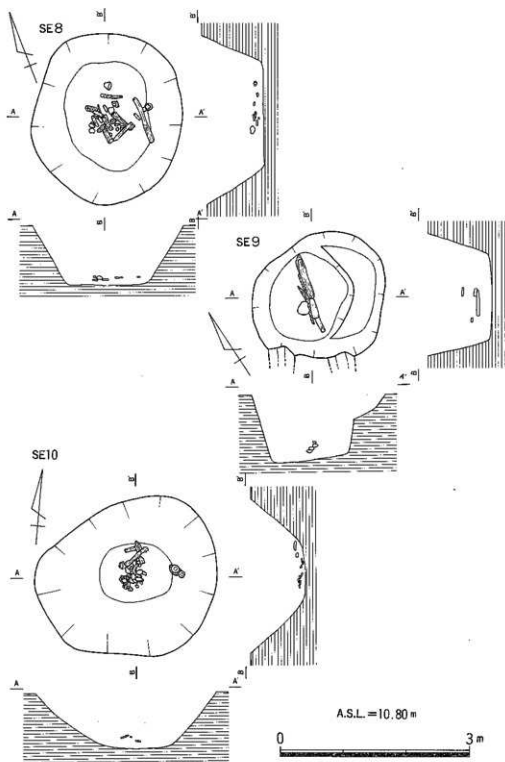
竪穴式住居



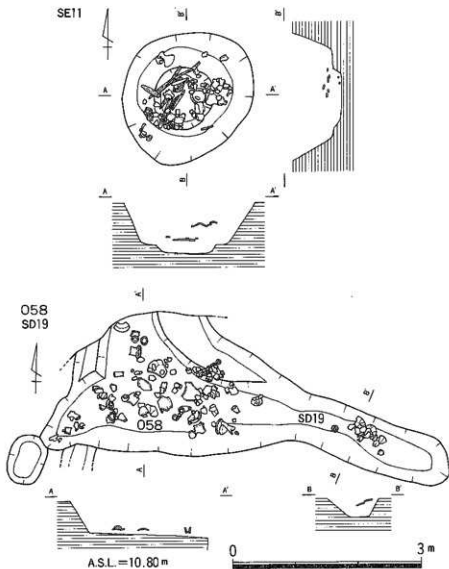
第4図 遺構実測図(1) 竪穴式住居・SK17・SK99



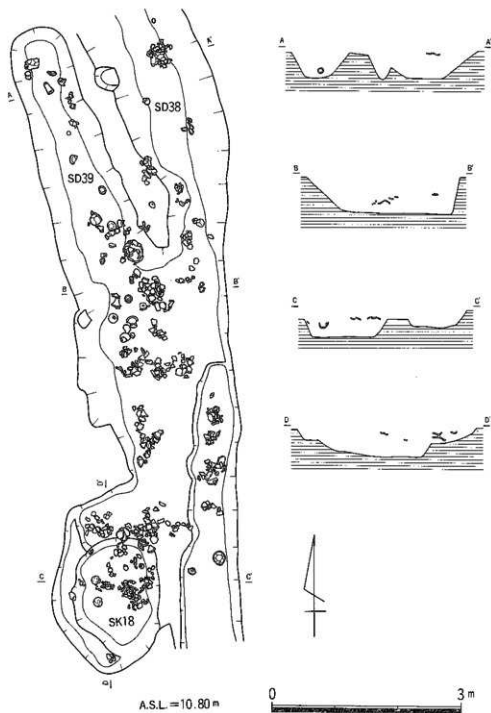
第5圖 遺構実測圖(2) SK39・SK44・SK48・SK60・SK52



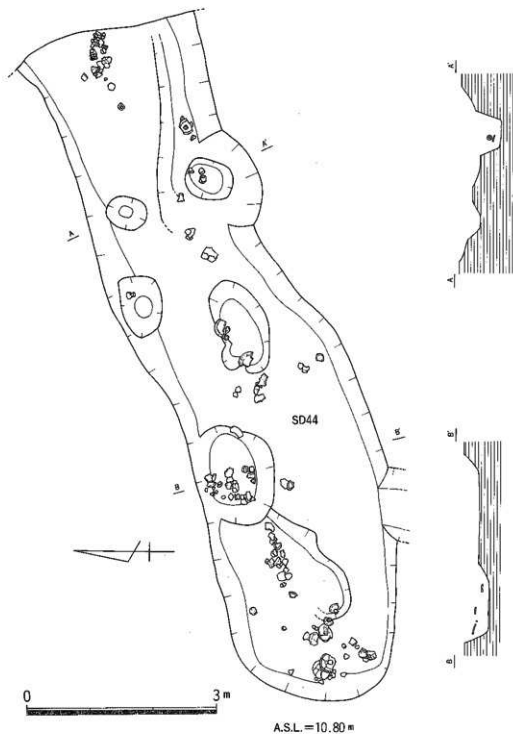
第6圖 遺構実測図(3) SE8・SE9・SE10



第7図 遺構実測図(4) SE11・058・SD19



第8図 遺構実測図(5) SK18・SD38・SD39



第9図 遺構実測図(6) SD44

II 中世（鎌倉時代）以降の遺構・遺物

平成6年度の発掘調査により検出された中世の遺構は、土壇状遺構・井戸・溝などがある。中世の遺構は近代の水田耕作のため上部が削平されて検出されている。

1) 土壇状遺構（SK）

SK10（第10図）直径約2.0m 短径約1.4m 深さ約0.45m 平面形は隅丸方形、断面は浅い掬り鉢状を呈し底面は平坦である。覆土は炭化物が多く認められ、レンズ状の堆積をしている。緩やかに長い時間を掛けて埋没した事を感じさせる。

出土遺物（第14図1～5）12世紀前半の湖西古窯産の小皿、小碗、碗が出土している。小皿は口径8.6cmで器高は1.9cmを計り高台は無い、碗は大きさで分けると口径が10cm以内の小型のものと口径17.7cm以上の形態に分かれ各2点ずつ出土した。形状不明の木材も検出された。

SK11（第10図）直径約2.06m 短径約1.65m 深さ約0.26m 平面形は隅丸方形、断面は浅い掬り鉢状を呈している。覆土はレンズ状の堆積で上層では有機質と炭化物の層があり、下層では砂質を含んだ粘土層が認められた。

出土遺物（第14図6～13）12世紀前半の渥美・湖西古窯産の山茶碗が出土している。口径は10.5cmを計る比較的小型の碗から17.5cmの碗までがあり、口縁部に中国の青磁を真似た輪花碗（9、13）が出土している。碗の底部にはいずれも糸きり痕があり、高台にはソミ痕が残っている。遺物を検出した位置は底面で散在していた。

SK15（第10図）直径約2.1m 短径約1.82m 深さ約0.45m 平面形は隅丸方形、断面は浅い掬り鉢状を呈し底面は平坦である。覆土の中央付近には炭化物が多く入る層がある。

出土遺物（第14図14～19）12世紀前半に該当する渥美・湖西古窯の小皿と山茶碗が出土している。小皿には高台は無く、底部には糸きり痕が残る。山茶碗は口径10.8cm、器高2.8cm～3.4cmを計る小型の碗と口径16.6cm～17.2cm、器高5.4cm～6.0cmの山茶碗とのふたつの形態がある。底部には糸きり痕があり少し難な作りの高台にはソミ痕が残っている。

SK42（第10図）直径約1.82m 短径約1.32m 深さ約0.38m 平面形は楕円形をしている。断面は浅い掬り鉢状をしており、覆土にレンズ状の堆積は見られず短期間に埋められた様子であった。

出土土器（第15図20・21）13世紀前半の常滑窯産の小皿と山茶碗が確認されている。小皿は口径7.6cm、器高1.6cmを計り、山茶碗は口径14.6cm、器高5.0cmで底部に墨書がある。意味は不明で祭祀に関係する墨書と思われる。皿、碗共に胎土は砂質を帯び白色粒が多い。

SK53（第10図）直径約2.3m 短径約2.24m 深さ約0.64m 平面形はほぼ円形をしている。断面はゆるい立ち上りの掬り鉢状で、底面は平らになっている。覆土はレンズ状の堆積を見せているが下層は砂利質が強い。

出土土器（第15図22～25）13世紀前半に該当する常滑古窯産の山茶碗と小皿が2枚が確認された。いずれの土器も胎土は砂質を帯び白色粒と小礫が目立つ。小皿と山茶碗は底部にSK42と同じ記号の墨書がある。山茶碗の高台は低く潰された様な貧弱な形である。

2) 井戸状遺構 (SE)

SE 1 (第11図) 直径約2.63m 短径約2.62m 深さ約1.0m 平面形はほぼ円形をなし、井戸の内部は2段に掘り込まれており井戸枠は無い。発掘調査中は雨が多く調査区内は濁った水に浸かってしまう事があったが、SE 1はいつの間か澄んだ水となり現在でも井戸として使用できそうであった。

出土遺物 (第15図26~29) 11世紀前半のものと考えられている清々谷古窯の山茶碗 (26・28・29) と12世紀中半と考えられている山茶碗 (27) が出土している。山茶碗は全体的に丸味を帯びており高台が高く、底部は糸きり痕が残る。

SE 2 (第11図) 直径約1.4m 短径約1.28m 深さ約0.93m 平面形はほぼ円形をしている。断面は垂直で井戸枠は検出されていない。覆土は有機質の多い土がレンズ状の堆積となっており、山茶碗と共に木の枝状の木材が検出された。

出土遺物 (第15図30~32) 12世紀中半の湖西古窯の山茶碗が検出されている。31は口縁部に輪花を施してあり、底部には「じゅう」と読める一文字の墨書がある。祭祀に関係する呪いのようなか意味は不明である。

SE 3 (第11図) 直径約1.64m 深さ約1.28m 平面形は円形で、断面は上部が少し広がる急な立ち上がりをしている。レンズ状の堆積の層は大きく、中程の層には砂利層も見られ洪水などで短期間に埋没した可能性もある。井戸枠は上部には建築材を転用した板を縦に使用し、土に埋もれる下側はV状に切り込まれている。内側には横に桟を渡した箇所もある。井戸枠の一枚には線刻 (第14図) がされていた。影ってある絵柄の意味は理解できないが祭祀に関わる呪いのようなかものであろう。

出土遺物 (第16図33~35) 13世紀前半の常滑古窯産の小皿と山茶碗が出土している。胎土は砂質をおび白色粒が目立つ。山茶碗には糸きり痕が残る、高台は低くモミ痕が残っている。

SE 4 (第11図) 直径約0.77m 短径約0.75m 深さ約0.45m 平面形は円形で断面は垂直となっている。覆土は黒色有機質を主体としたレンズ状の堆積が見られた。

出土遺物 (第16図36・37) 12世紀中半の瀬美・湖西古窯産の山茶碗が出土している。口径は2.8cm、器高は2.8cm~3.2cmの小型の碗である。井戸枠は薄板を曲げて輪にしてあるが、残存は輪の直径の約3分の2程度であった。

SE 5 (第11図) 直径約2.44m 短径約2.4m 深さ約1.37m 平面形は円形で断面は掘り鉢状をしている。覆土は攪乱状態で人為的に埋め戻しをしている様子であった。付近の基本層は砂質が大変強く、雨が降る度に層が大きく崩れ、水が湧きだす度に内部が崩れるという状態であった。井戸枠はやく3cmの半分に割った竹を縦の軸とし、1.5cm程に割った竹を編み込んだ竹籠であった。竹は皮の部分が汲み上げる水側になっていた。しかし長期間、土の中にあった竹籠はもろく、雨で崩れた土の下敷きとなって崩壊してしまい取り上げが不可能になってしまった。出土遺物は無いが井戸枠からSE 6と時期は同じであろうと推測する。

SE 6 (第12図) 直径2.86m 短径2.82m 深さ1.53m 平面形は円形をなす。内部は2段に掘り込まれて井戸枠はSE 5と同じく竹籠である。覆土の上層には小砂利の溜まった層があり、

埋まっていって段階に水害を受けている様子であった。

出土遺物 長さ199cm 幅11cm 厚さ2.5cmの鋸引きの杉の板が一枚検出されたが使用の目的は不明である。18世紀後半から19世紀（江戸時代）の瀬戸物の底部破片が出土している。

SE7（第12図）直径3.36m 短径2.93m 深さ1.12m 平面形はほぼ円形をなす。断面はゆるく立ち上がる摺り鉢状で覆土は井戸枠の外側と内側では堆積状況がちがう。円形に掘った掘り方の中心部に板を井桁に組んだ井戸枠を置き、その下には一部が井桁の井戸枠の下に入り込んだ状態の曲げ物の井戸枠がある。外側には裏込めの土を入れているが下層には粘土が使用され底部に近い程粘性は強くなる。井戸内側の覆土はレンズ状の堆積が見られ比較的時間をかけて埋没した様子をみせている。

出土遺物（第16図38・39）井戸枠は板を井桁に2段組んでいる。側板は長さ90cm～120cm、幅30cm～40cm、厚さ3cm～5cmの重量感のある板を使用している。板の両端部には凹と凸の切り込みがあり四隅が組合せられるようになっている。下にある曲げ物の井戸枠は薄板を曲げて木の皮で覆われており、直径は47cmを計る。曲げ物の井戸枠の中には木屑が廃棄されていた。曲げ物の井戸枠付近には逆三角の細い高台の12世紀中半の清々谷古窯座と思われる山茶碗と鉄製の火箸（第9図38・39）が一本出土している。

溝状遺構（SD）

SD2（第13図）発掘区の南端を東西方向に伸びる溝である。幅は約0.8m～1.2m 確認長約79.8m 深さは西端で18cm、中で13cm、東端で6cmと浅くなっている。SD2と並行し、SD3とはT字型に交わる。覆土は弱い粘性の暗灰色土で断面は浅いU字状を呈する。

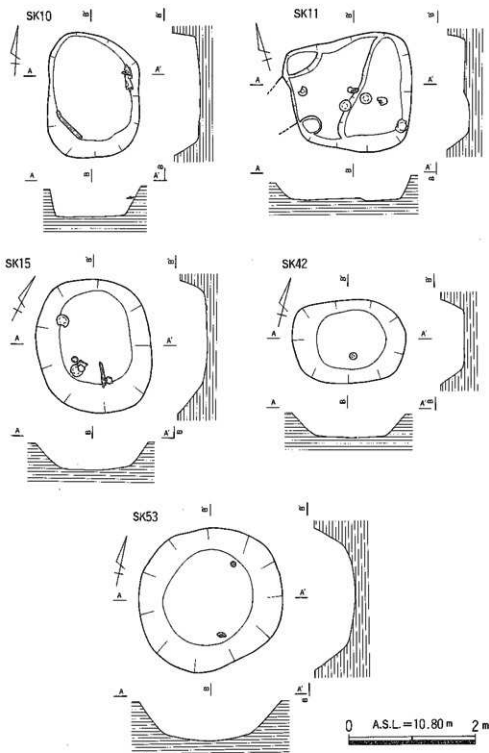
出土遺物（第16図40～45）清々谷古窯座の山茶碗が出土した。（45）の山茶碗は12世紀前半に該当し、小型で高台のついた碗（40・41）と（42・43・44）の山茶碗は12世紀中半に該当する。

SD5（第3図）発掘区の北端をSD12とほぼ並行して東西に伸びる溝である。幅は約1.0m～1.3m 確認長20.4m 深さ13cm 遺物出土位置は西端に集中して出土している。断面は浅いU字状で暗灰色土を覆土とする。西端部は強い砂利層が確認され旧河川の可能性がある。

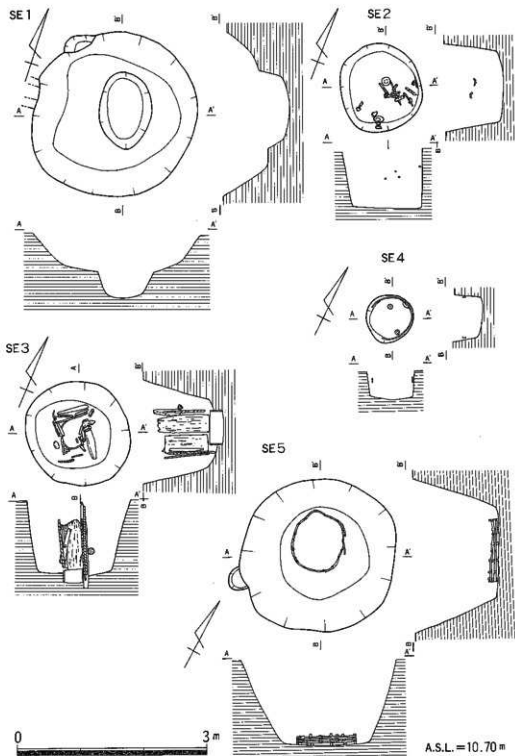
出土遺物（第17図46～51）12世紀中半の渥美・湖西古窯座の山茶碗が検出された。いずれも底部に糸きり痕とモミ痕が残るが高台の作りは雑になっている。（51）は口縁部に輪花を施している。

SD30（第13図）SD1の中付近から南北方向に伸びている溝で、北端でSD41と分かれる。幅は南端0.9m～1.3m 確認長約27.4m 深さ18cm～24cmの断面U字状の溝で、覆土は暗灰色土を主体としている。

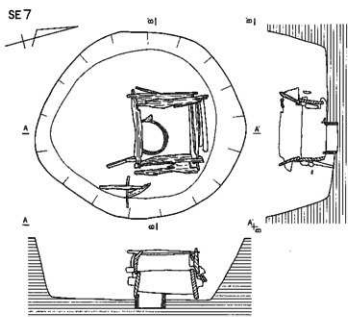
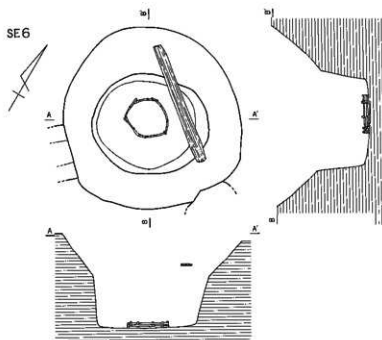
出土遺物（第17図52～59）12世紀中半の山茶碗が出土している。（56）は青灰色で体部が丸味を帯び、口縁部が大きく外反した菊川町皿山古窯座の山茶碗である。これ以外は渥美・湖西古窯座であり、口径が9.6cm～9.7cmを計る小碗と口径16.2cm～17.4cmの山茶碗の二つの形態がある。



第10図 遠柿築洲図(7) SK10・SK11・SK15・SK12・SK53

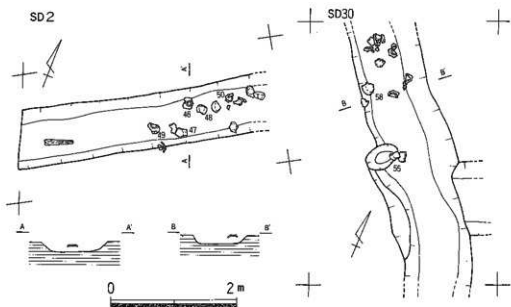


第11圖 遺構実測図(8) SE1・SE2・SE3・SE4

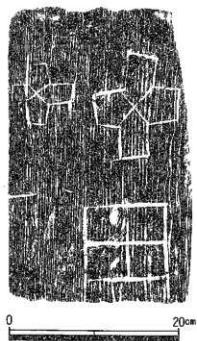


0 A.S.L. = 10,70 m 3 m

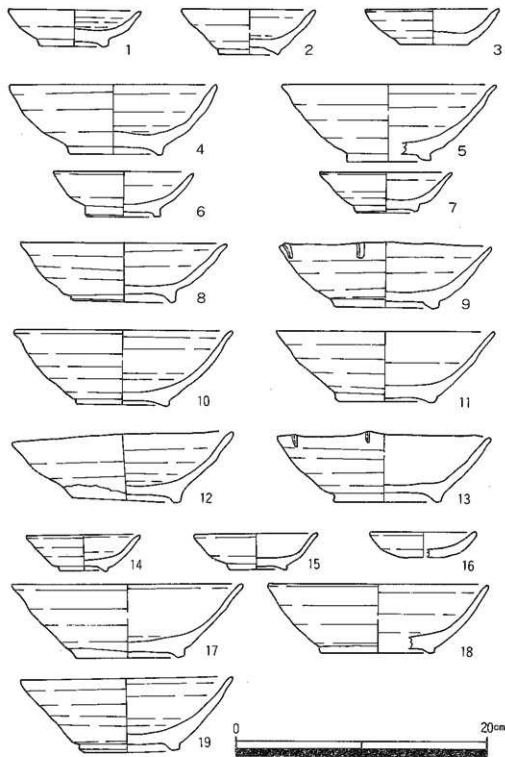
第12圖 遺構実測図(9) SE 6・SE 7



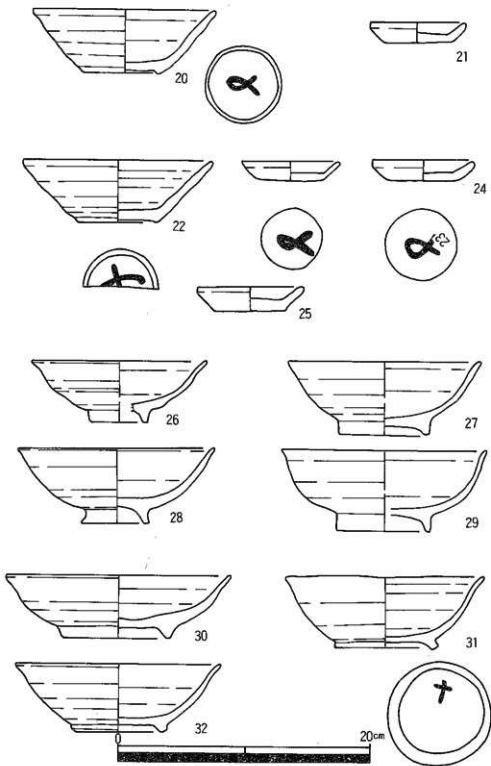
第13図 遺構実測図 SD2・SD30



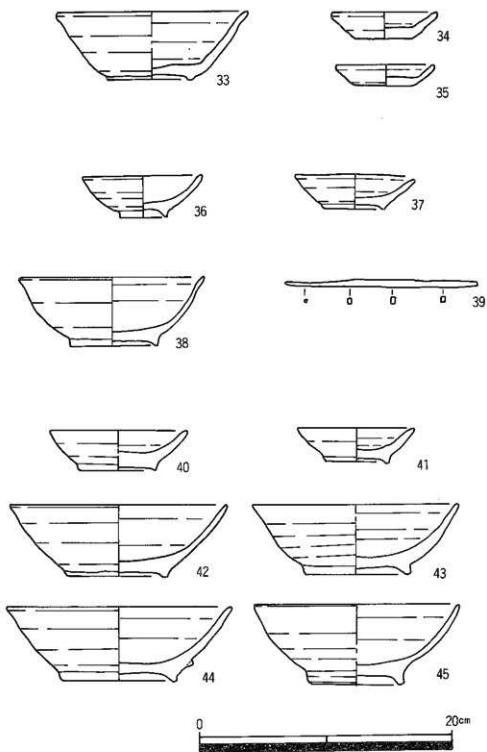
第14図 井戸伏道構SE3 出土井戸枠の線刻拓影



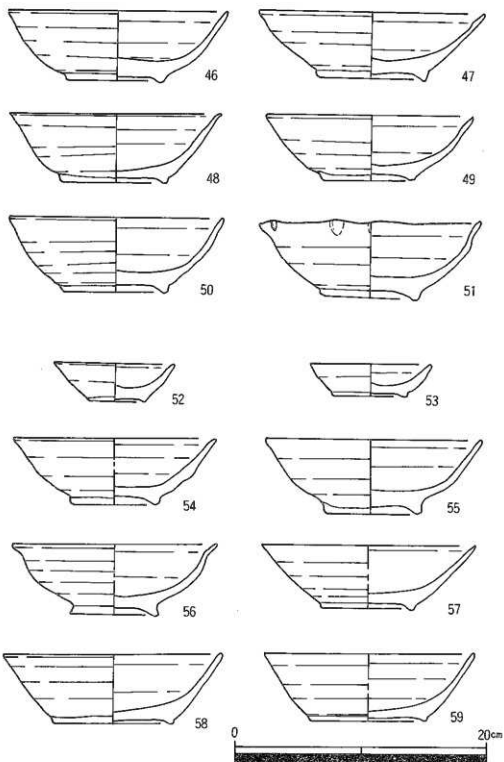
第15图 出土文物实例图(1)



第16図 出土遺物実測図(2)



第17圖 出土遺物実測図(3)



第18圖 出土遺物実測図(4)

第7章 まとめにかえて

袋井市と磐田市の市境付近を流れる太田川の左岸の自然堤防上には、弥生時代中期に稲作の技術を持った人々の集落跡である鶴松遺跡できた。それまでの縄文人のように自然が相手の採集生活に比べると、稲作による生産文化は土器にも道具にも大きな変化をもたらす事になる。安定した生活を確立する事が出来るようになるのと鶴松遺跡の人口は増加し周辺部に小さな集落となって広がっていく。それが鶴田遺跡・川田遺跡・堀越ジョウヤマ遺跡・徳光遺跡・土橋遺跡・玉越遺跡である。このように弥生時代の集落の推移が分かる貴重な地域の中に今回発掘調査された小山所田遺跡もある。

鶴松遺跡から土橋遺跡の方向に伸びる自然堤防は小山の八雲神社の南側に小さな島状の微高地を形成している。周囲の田の中にも島状の畑が数ヶ所ある所から上流から土砂を運んで来た旧太田川の流れがこのような状況を作り上げたであろうと想像できる。今回調査しなかった北側を除くと三方が後背湿地につながる水捌けの悪い所である。調査中も雨が多く、水の処理が大きな課題であったが、小山角田遺跡に住んでいた人々にとってはいつの時代にも水害が生活の中の大きな問題であったであろう。

今回の調査の結果をまとめてみると小山角田遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期と中世（鎌倉時代）の複合遺跡である事がわかった。そして弥生時代後期から古墳時代前期と中世の遺構を見ると、集落の中で分散して位置している事が分かる。まず弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は西寄り北端から南に伸びる溝（SD16）から東寄り北端の溝（SD38）の間に集中している。ちょうど自然堤防の高まりの上である。溝の規模は大きなものではないので、集落の周りがある溝と考えるよりも集落の中の区画割の溝と考えるほうが妥当であろう。土壌墓とも考えられる竪穴状遺構のSK52・60・47・44はSD38の東側の自然堤防の裾部にあたる所にある。SD38までを区画内とするならば土壌墓状の竪穴のある位置は区画外になる。ミニチュア土器、赤色に着色された土器、特殊な形態の高坏など祭祀に関わりを持つと考えられる遺物が確認された遺構はこの区画の中にある。井戸状遺構は底部に棒状の木材が土器と共に検出されるという特徴を持って、自然堤防の裾部に作られている。竪穴住居跡は今回の調査区内で最も高い所に作られている。現状は茶畑であるがこの茶畑上には黒茶灰色の包含層があり、生活の場がこの辺りから北側にある事を想像させた。

古墳時代前期になると小山角田遺跡から人々がいなくなってしまう時期がくる。鎌倉時代までの約800年間である。今回の調査区の西北端から南西に向けて斜め方向に非常に強い砂礫層が確認されている。これは旧太田川の支流跡であろう。人々の去った原因として川の氾濫によりこのあたりが住みにくい環境となってしまった事が考えられる。

鎌倉時代になると玉越遺跡や土橋遺跡に見られるように環境を持った建物が作られる。小山角田遺跡でも調査区南寄りの南端を東西に伸びるSD1・2北寄りを東西方向に伸びるSD5・12中央付近を南北に横切るSD30・41の並行する2条の溝によっての区画がある、その中側に2棟の獨立柱建物が建てられている。そして北端には土壌が数基集まるとっており、南東端に

は大きな井戸が掘られている。区画内の遺構は共に12世紀の同時期の山茶碗が検出されている。

13世紀の遺構は自然堤防の東の裾部にある。同じ記号の墨書土器が出土した土竪(SK42・53)と呪いと思われる線刻の建築材が出土した(SE3)である。ここにも決められた区画割りがあった様子である。

この他では近世(江戸時代)の竹で編んだ井戸枠の(SE6・7)が確認された。

調査を終了してみると小山角田遺跡は弥生時代から、生活する所、祭祀を行う所、葬る所等しっかりと区画割りした中で日々の暮らしが行われて来たように思われる。発掘した位置は集落の端部で住居跡は少なく、生活するのに欠かせない施設の集まる区域なのであろう。

本調査を実施するにあたり、永興物産株式会社代表取締役 植田常幸氏には大変お世話になった。文化財に対する深いご理解とご協力に対し心よりお礼申し上げます。

報告書を作成するにあたり、お忙しい中時間を割いてご教示下さった静岡県埋蔵文化財調査研究所の岩本貴氏と、雨の多い年にも関わらず作業が予定どおり終了したのは作業員の皆様の骨身を惜しまぬご協力があったからこそと、文末ではありますがここに記して深く感謝の意を表します。

担当者の力不足の為に時間が無く、弥生時代後期から古墳時代前期の貴重な資料を最後まで整理できないで報告書を提出する時期がきてしまいました。数多い資料は袋井市だけではなく、遠江の弥生時代を考える重要な資料になると思われます。継続して整理し、機会をみて報告させて頂きたいと思います。

(早川保子)

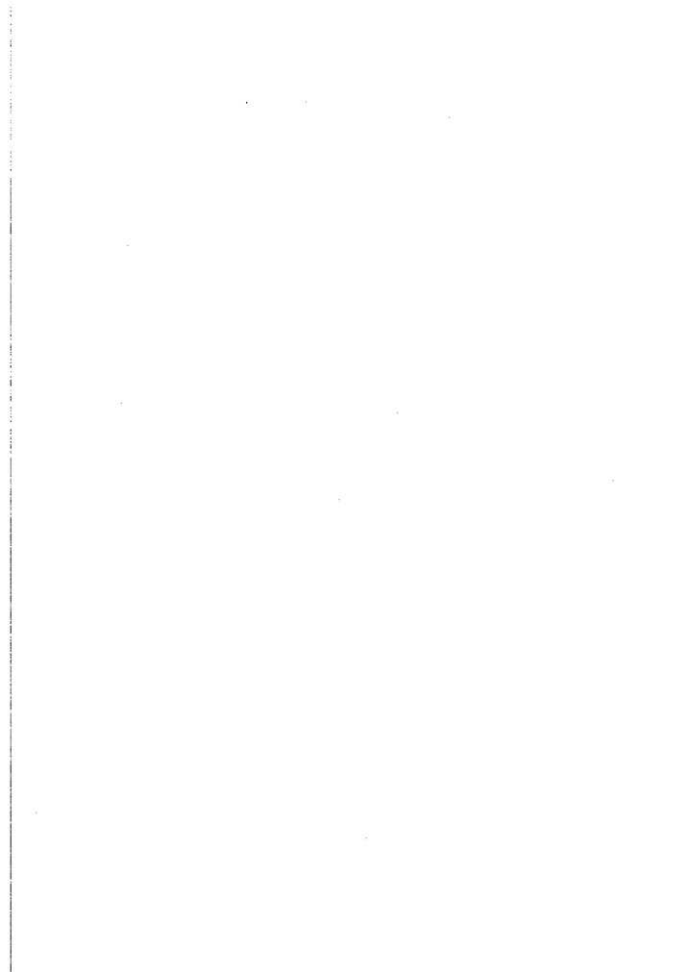
参 考 文 献

静岡県	1994	『静岡県史 通史編 原始・古代』
静岡県教育委員会	1989	『静岡県の窯業遺跡 本文編』
磐田市市役所	1993	『磐田市史 通史編上巻 原始・古代・中世』
磐田市教育委員会	1986	『玉越遺跡』
松井一明	1993	「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』
袋井市市役所	1983	『袋井市史 通史編』
袋井市教育委員会	1981	『一色前田遺跡』
袋井市教育委員会	1984	『玉越遺跡』
袋井市教育委員会	1985	『土橋遺跡』
袋井市教育委員会	1987	『鶴松遺跡 II』
袋井市教育委員会	1990	『若作遺跡 若作古墳群』
袋井市教育委員会	1991	『堀越ジョウヤマ遺跡』
袋井市教育委員会	1989	『袋井市原川城跡・坂尻遺跡』

(付 載)

小山角田遺跡における弥生時代後期末～
古墳時代前期初頭の土器

岩 本 貴



(付載)

小山角田遺跡における弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器

岩 本 貴

本章では、小山角田遺跡から出土した弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられるSK-17、SK-39の遺物（土器）について報告する。

SK-17

SK-17は、不整形を呈する円形の土坑である（遺構編第4図参照）。出土遺物は、土器、木製品等が認められるが、この内壺形土器5個体、壺形土器8個体、高杯形土器4個体、小型の鉢形土器2個体の合計19個体を図示した（第1～3図）。また、図示していないが、この他にミニチュア土器が4点出土している（写真図版参照）。

壺形土器

菊川式系のもの（第1図5、6、9）と東海西部地方の影響が見られるもの（第1図7、8）の2系統に大別できる。

折り返し口縁の第1図5は、口縁部内面と肩部以下に櫛状の工具による刺突羽状紋（以下、櫛刺突羽状紋とする）を数段施す。なお、肩部施紋の上端には、櫛状の工具による横位の刺突紋（以下、櫛刺突直線紋とする）が2段施され、口縁端部外面に棒状浮紋（6個1組3ヵ所）を、肩部に豆粒状の円形浮紋（3個1組3ヵ所）を付加する。また、胴部に僅かな赤彩が認められる（スクリーントーン部分）。第1図6は、同5と同様に折り返し口縁を有するが、口縁部の外反がやや弱いものとなり、折り返し部の裏側（口縁部の曲線と平行する面）が側面から見えること、櫛刺突羽状紋等の施紋が認められず、胴部がやや球形を指向すること等、新しい要素が認められる。第1図9は、胴部上半を欠損するが、胴部形態、胴部最大径付近以下の横位のヘラミガキ等から菊川式の系譜としてとらえられよう。

単純口縁の第1図7は、屈折した頸部と球形を指向した胴部を有するものである。胴部外面は、ハケによって調整され、施紋は認められない。第1図8は、肩部に櫛刺直線紋を2段、櫛刺突波線紋を1段施し、それ以下を縦位のヘラミガキによって調整する。そして、施紋部分を除く無紋部分に赤彩を施す（スクリーントーン部分）。第1図、8は、東海西部地方に系譜が求められ、赤塚次郎氏編年案の廻間Ⅰ～Ⅱ式（赤塚：1990）に相当すると考えられる。

高杯形土器

東海西部地方の元屋敷式の系譜としてとらえられる（第1図4、第2図1、3）、北陸地方の影響と考えられるもの（第1図1）が認められる。

第1図4は、杯底部以下を欠損するものであるが、口径と底径のひらきが大きく、杯部が浅いもので、赤塚次郎氏編年案の廻間Ⅱ式（赤塚：1990）に相当すると考えられる。

第2図1は、丁寧なヘラミガキによって調整されるもので、脚部形態、口縁端部細部湾曲調整技法（赤塚：1990）を有すること等、廻間Ⅱ式1段階（赤塚：1990）に相当するものと考えられる。第2図3は、脚部上半以上を欠損するものであるが、高杯の脚部になるものと推測される。縦位のヘラミガキによって調整される。

第1図1は、いわゆる北陸系の高杯である。口縁部を欠損し、残存状態は決して良好とは言えない。脚部の透かし穴の部分は、残存していない。なお、図示していないが、本遺跡から本資料以外に同様な高杯が3個体出土している。

鉢形土器

直線的な口縁部を有するもの（第1図2）と、東海西部の影響と考えられる内湾した口縁部を有するもの（第1図3）が認められる。

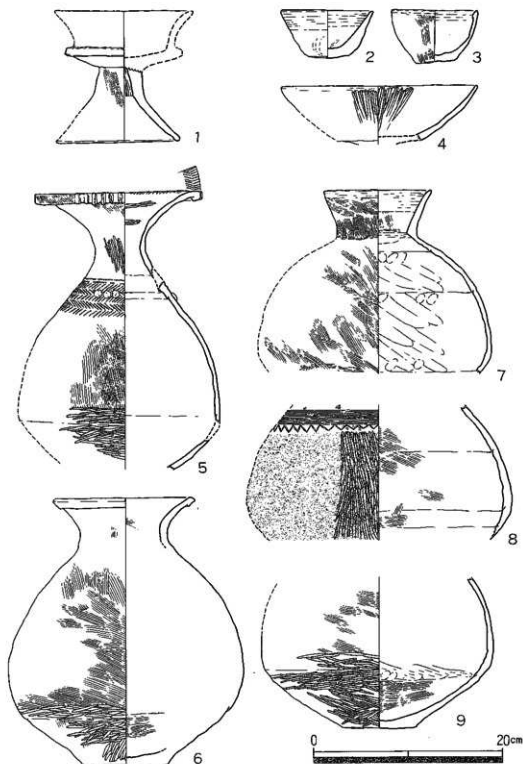
第1図2は、小型品であるため形式の認定が可能か否か今後の資料の増加を待ちたいが、同3は、口縁端部細部湾曲調整技法（赤塚：1990）が認められ、欠山式（廻間Ⅰ式）に類例が求められる。

甕形土器

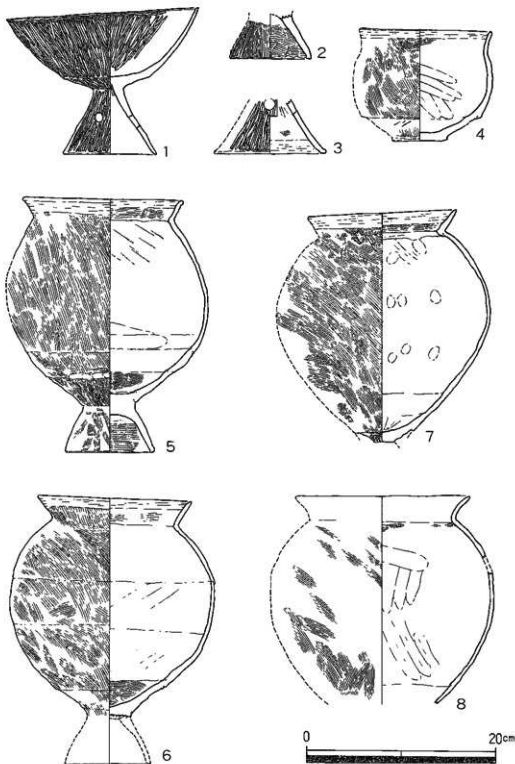
いわゆる台付甕（第2図2、5～8、第3図1、2）と、平底の甕（第2図4）が認められる。

台付甕は、口縁端部にキザミを有するものが皆無であり、口縁部内外面をヨコナデするものに限られる。しかし、ヨコナデの及ぶ範囲が、頸部付近にまで及ぶもの（第2図5、第3図2）とそうでないもの（第2図6、7、第3図1）の2者が認められる。台部については、内面をハケによって調整するもの（第2図2、5）が多く、菊川式のそれにナデ調整が多いことを考え合わせるならば、口縁部調整と同様に、東海西部の影響が強いとすることができよう。

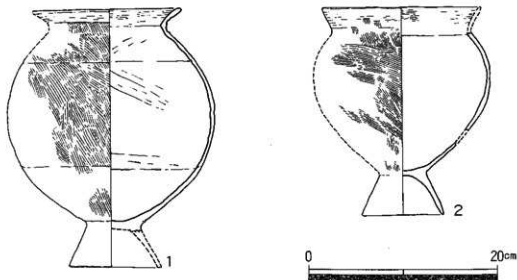
平底甕は、台付甕と同様に口縁部内外面をヨコナデするもの（第2図4）である。平底甕の類例は、必ずしも多いとは言えないが、菊川式にも一定量存在する器種である。口縁端部にキザミを施し、器高が比較的低いものから、第2図4のような、口縁部内外面をヨコナデし、器高が高いものに変化する（台付甕の長胴化と連動か）と考えられる。



第1圖 SK-17出土土器実測圖



第2圖 SK-17出土土器実測圖



第3図 SK-17出土土器実測図

SK-39

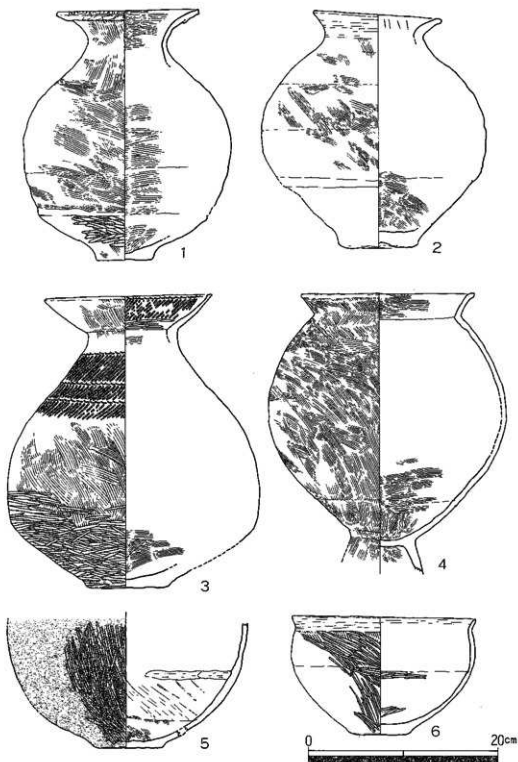
SK-39は、SK-17と同様な不整形を呈する円形の土坑である（遺構編第5図参照）。他の遺構との切りあい関係が認められず、覆土中から出土した土器群は、一括性がきわめて高いと考えられることから、中遠地方における弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の上器研究において、貴重な資料を提供している。

SK-39からは、壺形土器5個体、甕形土器3個体、高杯形土器2個体の合計10個体を図示した（第4～5図）。

壺形土器

菊川式系と考えられるもの（第4図1、3、第5図2）と、東海西部地方の影響によって成立したと考えられるもの（第4図2、5）が認められる。

菊川式系と考えられるもののうち、最大径を胴部下位に有するものは、頸部が屈曲する内湾気味の単純口縁を有するもので、調整、施紋方法は、荒いハケ状の工具による調整の後に、口縁部内面及び、肩部外面に結節縄紋を、胴部最大径以下には、横位のヘラミガキを施す（第4図3）。球形に近い胴部を有するもの（第4図1）は、第4図3と同様に、胴部下位に製作中止痕が認められるものの、胴部上半の自重に耐えきれず多少変形しており、球形胴の製作に稚拙さがうかがえる。外反の弱い折り返し口縁を有し、端部にヘラ状の工具によるキザミが施される以外施紋は認められない。



第4圖 SK-39出土土器実測圖

第5図2は、やや広がりの弱い単純口縁を有する小型品である。肩部に段を有し、それ以下に櫛刺突羽状紋を3段施す。

東海西部地方の影響によって成立したと考えられるもの(第4図2)は、胴部最大径がその中位に位置し、頸部から短く外反する単純口縁を有するものである。調整、施紋方法は、やや荒いハケ状の工具によって器壁を調整した後、口縁部内外面をヨコナデし、その内面に櫛状の工具による刺突を散漫に施す。また、第4図5は、胴部最大径以上を欠損するが、胴部外面を縦位のヘラミガキによって調整し、赤彩(スクリーントーン部分)を加える。

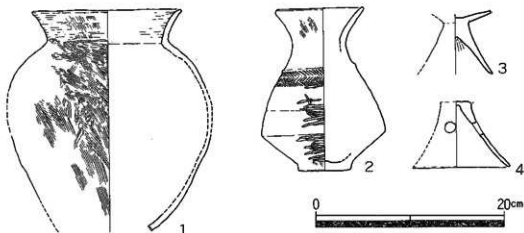
変形土器

台を有するいわゆる台付甕(第4図4、第5図1)と、平底の甕(第4図6)が認められる。

第4図4は、胴部最大径をその中位に持ち、頸部が内面に稜線をもって屈折し、やや外反気味の口縁部を有するものである。胴部調整は、やや荒いハケ状の工具によって調整した後、口縁端部付近のみヨコナデ調整される。なお、ヨコナデによって口縁端部には明瞭な面が認められない。

底部以下を欠損しているものの、第5図1も台付甕になると推測される。調整方法は、やや荒いハケ状の工具によって調整した後、口縁部内外面を頸部付近までヨコナデ調整する。第4図4と同様にヨコナデによって口縁端部には明瞭な面が認められない。

平底甕としたものは、胴部最大径が器高を大きく上回ることから鉢とするのが妥当であるかもしれない。胴部外面は、荒いハケ状の工具による調整の後、ヘラミガキによって調整されている。口縁部は、内外面共に頸部付近までヨコナデ調整されるため、端部に明瞭な面は認められない。



第5図 SK-39出土土器実測図

高杯形土器

第5図3、4は元屋敷式系の脚部である。部分的な資料の上、器壁の摩滅が著しく、仔細については検討不可能であるが、裾部が外反することから赤塚氏編年案の廻間Ⅱ式以降（赤塚：1990）に平行するものと考えられる。

まとめ

SK-17、SK-39から出土した土器は、多少の時期差が存在する可能性が認められるものの¹⁰、共に元屋敷式系の高杯を共伴することから、従来の編年で言う元屋敷（様）式・古（弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）に相当するものと考えられる（中嶋：1991）。すなわち、型式変化した菊川式系の壺形土器等に外来系土器である元屋敷式系の高杯等が共伴するという転換期に相当する。本資料と並行関係にある資料として、土橋遺跡SD-125の一部（袋井市：1985）川田・藤蔵遺跡SK-9（袋井市：1993）、女高遺跡4号住居址（掛川市：1983）あるいは、一色前田遺跡3～4号住居址（袋井市：1981）等が挙げられる。

他方、遺構の機能に関しては、完形品を含み、形態的に類似するものも多く、一括して投棄または、埋納された可能性がきわめて高いことを指摘する以外に、遺構としての機能を特定する積極的な状況証拠は認められないことから、これについては、不明と言わざるを得ない。

—SK-39出土土器の編年的位置付け—

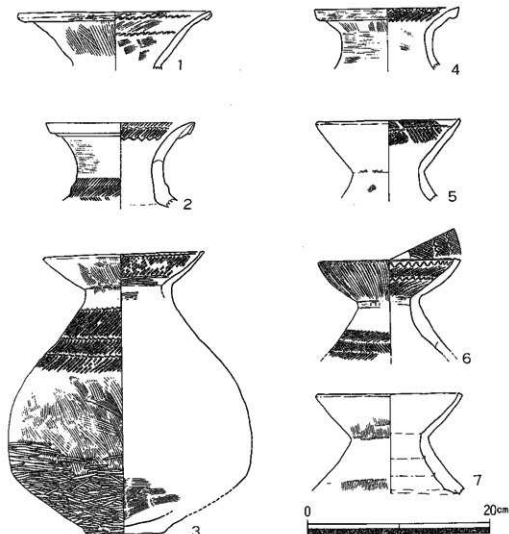
以下では、古墳時代前期初頭に相当する良好な資料を提供することとなったSK-39出土土器を中心に、当該期の土器様相を概観する。

SK-39から出土した結節縄紋を施す単純口縁の壺形土器（第4図3）、口縁端部にキザミを持たず、ヨコナデ調整される台付の甕形土器（第4図4、第5図1）、元屋敷式系の高杯等に見られるように、当資料の編年的位置付けは、元屋敷（様）式の前段階（中嶋：1991）に相当すると考えられる。

壺形土器について

ところで、第4図3のような胴部最大径をその下位に有する壺形土器は、菊川式の壺形土器に系譜をたどることができるが、当該期の在来系の壺形土器は、その変遷がつかみにくく、編年的位置付けは、共伴する高杯、甕形土器等の編年観が重要な指標となることが多い。その一因として、在来系土器である菊川式が、東海西部地域を淵源とする元屋敷式系の器種の参入を契機として、在地の要素を継承しながら変容して行くという複雑な変化を遂げることから、在来系器種の型式変化の画期は、不明瞭であったことが挙げられる。しかし、いま一度、菊川式

～東海西部地方の元屋敷式に並行する様式（以下、中遠古式土師器様式とする）に該当する土器群を再検討してみると、特に、壺形土器における結節縄紋の採用、単純口縁の頸部が屈折するもの、折り返し口縁における外反が若干弱まり、折り返し部の裏側（口縁部の曲線に並行する面）が側面から見えるものの出現等によって従来の菊川式新段階とは明確に区別される一群が抽出される（第6図）。このような共通点が認められながら、これらが一括されない最大の根拠は、共存する高杯形土器の形式が相違することに求められると考えられる。すなわち、菊川式の高杯は、中遠古式土師器様式の成立をもって消長し、元屋敷式系の高杯形土器にとって



第6図 結節縄紋または、屈折した頸部を有する壺形土器の類例

代わられることが前提となっている。様式の画期の根拠として形式の出現、消長を念頭に入れた今日の大別は、的を得たものとして広く一般化されているものであるが、在来系土器の画期と元屋敷式系土器参入の画期が、截然とはならない可能性が指摘できる。これは、換言すれば、遺構における共伴を最大の根拠としていた従来の時期決定が、有効な指標となる反面、連続と継続する在来系土器における型式変化等の問題解決には直接結びつかないという弊害を生んでいたことが指摘できる。

甕形土器について

SK-39の甕形土器は、口縁端部にキザミを有するものが皆無で、ヨコナデを施すものによって占められる。また、胴部は、長胴化を指向しており、壺形土器の変化と同様にそれ以前（従来の菊川（様）式・新）の資料とは明確に分離することができる。また、口縁端部に面を持つものも皆無であり、東海西部地方の影響が強い資料として位置付けられる。これらの形態変化は、中遠地域における当該期の様相として既に指摘されている（松井：1990）が、本資料は、他器種との良好な共伴関係を有したものであるとして基準となる資料である。

おわりに

以上のように、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に相当するSK-17、SK-39の遺物（土器）について報告した。小山角田遺跡における当該期の資料は膨大な量にのぼり、大半が現在も整理継続中である。今回報告した資料と同様に、小山角田遺跡の弥生土器、古式土師器は、中遠地域の土器研究において、きわめて貴重な資料を提供することが期待される。今後は、これらについても逐次報告して行かなければならないことを痛感している。

本報告に際しては、以下の方々に御協力頂いた。記して感謝致します。加藤理文、柴田隆、白澤崇、鈴木敏則、永井義博、早川保子、松井一明（敬称略、五十音順）

（いわもと たかし：静岡県埋蔵文化財調査研究所）

- (1) SK-17出土の壺形土器（第1図5）は、器高が高く、口縁端部に棒状浮紋を施す等、従来の編年観では菊川式の範疇に収まるものであり、他の資料とは若干様相を異にする。この存在からSK-17出土土器には若干の混入品が含まれる可能性がある。

参 考 ・ 引 用 文 献

- 中嶋郁夫 1991 「東遠江・駿河」 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器
東海埋蔵文化財研究会
- 赤塚次郎 1990 「Ⅴ 考察」 廻間遺跡 愛知県埋蔵文化財センター
- 松井一明 1990 「第3章 総括」 若作遺跡 若作古墳群 袋井市教育委員会
- 袋井市教育委員会 1981 袋井市一色前田遺跡
- 袋井市教育委員会 1985 土橋遺跡－基礎資料編－
- 袋井市教育委員会 1993 川田、藤蔵瀧遺跡
- 掛川市教育委員会 1983 行人塚遺跡発掘調査概報

第6図土器実測図出典

- 1、5、7 一色前田遺跡（岩本実測）
- 2、4 土橋遺跡（袋井市：1985）
- 3 本報告
- 6 川田藤蔵瀧遺跡（袋井市：1993）



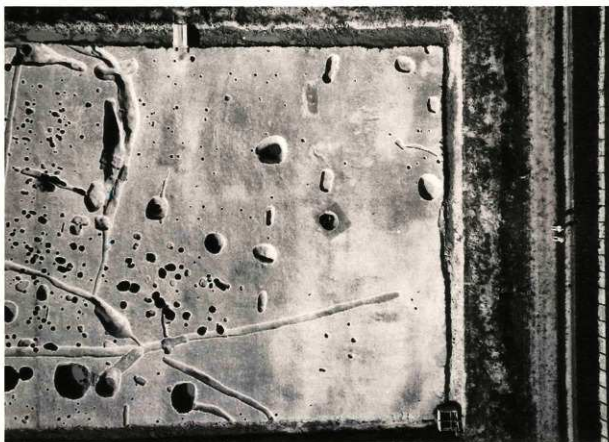
(1) 発掘調査区全景



(2) 西区全景



(3) 中央区全景



(4) 東区全景



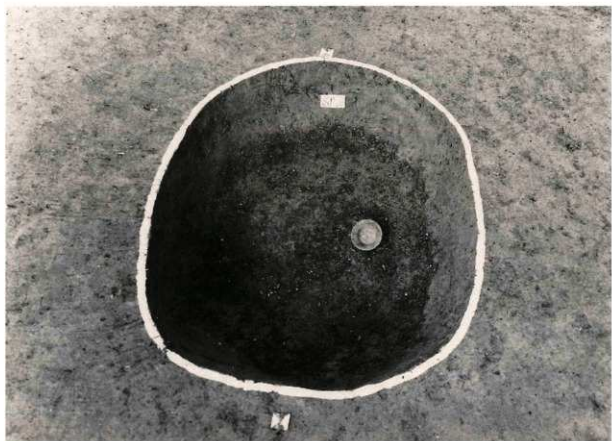
(5) 土坑状遺構 S K10 (東から)



(6) 土坑状遺構 S K11 (北から)



(7) 土塊状遺構 S K15 (東から)



(8) 土塊状遺構 S K42 (西から)



(9) 土坑状遺構 S K53 (北から)



(10) 井戸状遺構 S E1 (東から)



01 井戸状遺構 SE 2 (北から)



02 井戸状遺構 SE 3 (東から)



03 井戸状遺構 SE 4 (西から)



04 井戸状遺構 SE 5 (東から)



(15) 井戸状遺構 SE 6 (北から)



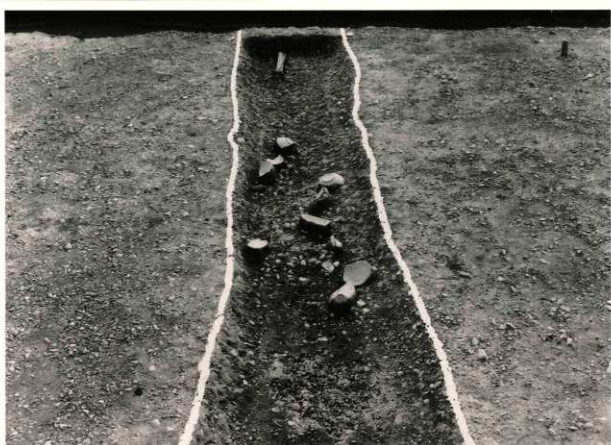
(16) 井戸状遺構 SE 7 (北から)



⑪ 溝状遺構 SD1・SD2 (西から)



⑫ 溝状遺構 SD30・SD41 (北から)



019 溝状遺構SD5 (東から)



020 溝状遺構SD29 (北から)



01 竖穴式住居（南から）



02 竖穴状遺構 S K39（東から）



03 竪穴状遺構 SK44 (西から)



04 竪穴状遺構 SK47 (西から)



05 堅穴状遺構 S K48 (東から)



06 堅穴状遺構 S K60 (北から)



07 堅穴状遺構 S K52 (北から)



08 井戸状遺構 SE 8 (東から)



㉔ 井戸状遺構SE9 (南から)



㉕ 井戸状遺構SE10 (西から)



⑧ 井戸状遺構 SE11 (東から)



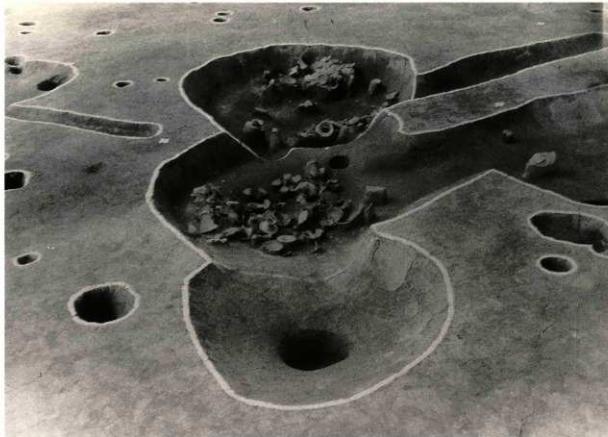
⑨ 溝状遺構 SD19・058 (西から)



63 溝状遺構 S D38・S D39・S K18 (南から)



64 溝状遺構 S D44 (東から)



㉟ 土坑状遺構SK17・SK99（東から）



㊿ 溝状遺構SD13・080（北から）



07 発掘調査風景



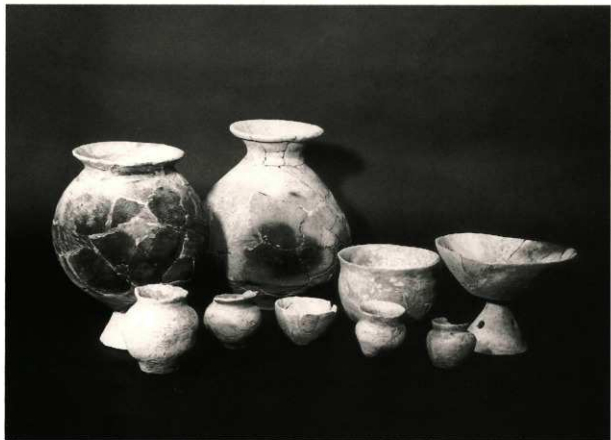
08 発掘調査風景



(39) 発掘調査風景



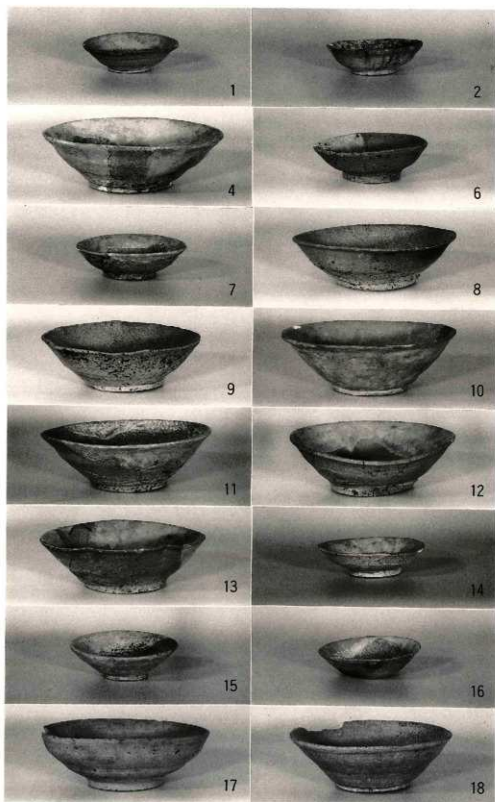
(40) 空中撮影用ラジコン・ヘリコプターを操作する関係者



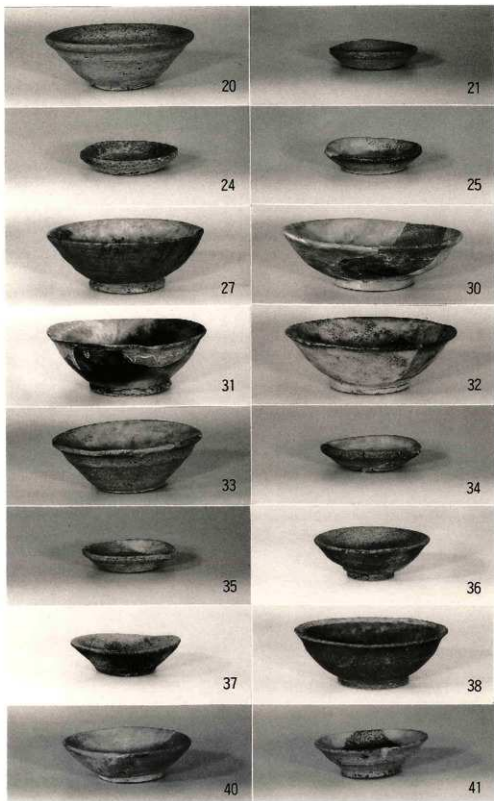
① SK17出土土器集合写真



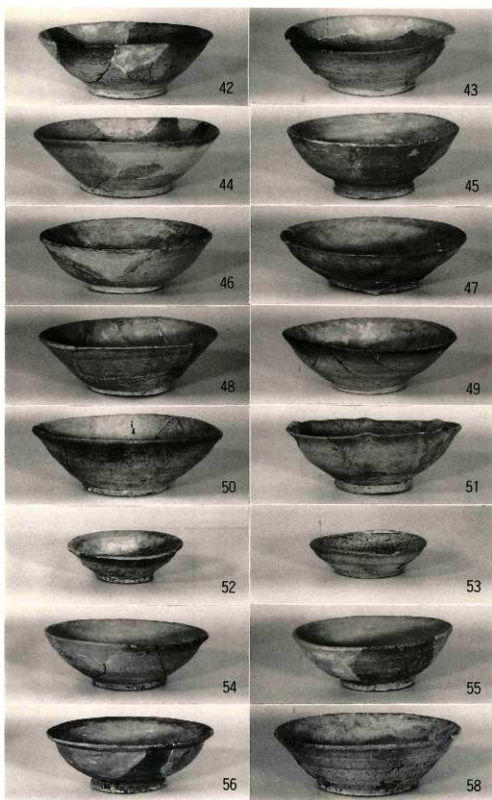
② SK39出土土器集合写真



43 出土遺物写真（その1）



44 出土遺物写真(その2)



(45) 出土遺物写真(その3)

報告書抄録

ふりがな	おやますみ たい せき							
書名	小山角田遺跡							
副書名	永興物産株式会社袋井工場敷地造成事業に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	早川保子							
編集機関	袋井市教育委員会							
所在地	〒 437 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 Ⅷ 0538-43-2111							
発行年月日	1995年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ 市町村	ー 遺跡番号	北 〇〇〇	東 〇〇〇	調査期間	調査面積 (一㎡)	調査原因
小山角田	静岡県袋井市 小山七つ 会204-1					19930401 ↓ 19940325	3,500㎡	工場建設用地内
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構		特記事項		
小山角田	集落跡	弥生時代から古墳時代前期及び鎌倉時代	溝跡、不定形落ち込み、ピット井戸跡、柱穴	弥生土器、古式土師器、木製品、山茶碗、曲物、種子		古墳時代中期から平安時代の遺構・遺物は検出されておらず古環境の変化の復元にも役立つ。		

小山角田遺跡

(永興物産株式会社袋井工場敷地造成)
事業に関わる緊急発掘調査報告書

1995年3月20日

編集 静岡県袋井市新屋1-1-1
発行 袋井市教育委員会 ©
TEL 0538-43-2111
印刷 浜松市中浜町1-1
株式会社 開明堂